

【ドーミエ ～激動の19世紀フランスを描いた男～】(概説)

令和5年1月20日(金) — 2月19日(日)

フランスの画家、彫刻家であり、優れた風刺画を描き喝采を浴びたオノレ・ドーミエ(1808-1879年)は、マルセイユで生まれ一家でパリに移り住んだのち、彼の石版画の才能を新進気鋭のジャーナリスト、シャルル・フィリポンに見込まれ、フランス七月革命の最中にデビューします。その後もさらに絶え間ない革命と反動で揺れ動く、激動の19世紀を描き続けるドーミエはまさに時代の申し子でした。

ドラクロワが描く「民衆を率いる自由の女神」でも有名な1830年の七月革命は、ドーミエ自身もパリに築かれたバリエードで戦いました。その後ブルボン復古王朝が倒れ、民衆は戦果の一つである出版の自由を手に入れました。こうした高揚した時代背景と、出版の自由を勝ち取ったことによるジャーナリズムの隆盛が、当時22歳のドーミエを風刺画に導きました。彼の活躍の舞台にもなった政治風刺新聞は、革命で血を流した者と利益を手にした者が必ずしも同一ではなかった真相を暴き出し、訪れたしばしの平和に満足していた民衆に、権利に対する新たな自意識を目覚めさせました。

ドーミエが描いた政治風刺画の初期の頃に、政府軍による労働者一家惨殺の現場を描きその非道さを訴えた「トランスノナン街、1834年4月15日」や、獄につながれた男が共和国の不滅を確信する「それでも彼女(自由)は進む」などの傑作があります。彼は、共和主義の旗印を鮮明に、革命の果実を大ブルジョアに奪われていること、平和と自由が侵されていることを痛烈に批判しました。

ドーミエにとって風刺画は、もはや単に文字の読めない民衆を笑わせるための慰みのものではなく、自己の主張を伝達するものであり、生涯にわたり4000点もの作品を生み出すたゆまぬ努力によって、芸術の域にまで押し上げました。

のちの出版規制で直接的な政治風刺画の新聞掲載が困難になっても、ドーミエは身近な人物にスポットを当てユーモアを交えて描く社会風刺に転換し、国内外のニュースをすぐさま絵で報道したり、パリの人々、芸術家たち、親子、友人、夫婦などが巻き起こす日常生活を描いたり、新たな言論活動を開拓します。さらに、間接的な政治風刺を試み、七月王政の拝金主義には、自分の利益のために手段を選ばず奇想天外な詐欺を働く『ロベール・マケール』を登場させこれを揶揄し、独裁権力をふるう未来の皇帝ルイ・ナポレオンの出現に対しては、一目でナポレオン本人とわかる『ラタポワール』という帝政復活に執念を燃やす悪のシンボルを生み出し、その存在に警鐘を打ち鳴らします。

帝政時代のかつてない厳しい出版規制の下でも、^{ぐういてき}寓意的な表現によって絶えない戦争の愚かしさを訴え続け、国家が植民地獲得に^{ちみち}血道を上げているときに平和を求めるメッセージを発信します。弾圧されても頭をもたげる不屈の抵抗精神は、おしゃべりが聞こえてきそうなたった1コマの絵により、権力を批判し、笑い飛ばし、そして戦争の悲惨さを訴え、風刺画の可能性を押し広げました。

^{ふふつ}普仏戦争(フランス帝国・プロセイン王国)でプロイセン王国に敗れたフランス帝政が崩壊し、パリ・ミュンで多くの人民が倒れ、その犠牲の上に共和国が打ち立てられたのを見届けた後、ドーミエはその視力を完全に失ってしまいました。時代とともに生きたドーミエが描いたのは移りゆく19世紀フランスそのものでした。